

「期待はいつも裏切られてばかりだが」 ルカ 13：1～9

## I 導入部

おはようございます。9月の第五日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に、大型台風接近の中ですが、私たちの救い主であるイエス・キリスト様を賛美し礼拝できますことを心から感謝致します。また、9月30日、9月の最後の日にも、礼拝を持ってこの月を終えることができますことを感謝致します。

私たちは、それぞれに誰かに期待をします。親は子に、先生は生徒に、信徒の方々は牧師にと期待をかけます。逆もあるでしょう。期待通りに生き、納得のいく結果を出す人もいます。けれども、いつまでたっても何の芽も出ずに、期待が裏切られるということもあります。期待される側は、はなはだ迷惑と言うこともあります。私たちが、期待するというのは、自分にとってどうかということであり、ある意味では自分の満足、自己中心を示しているのかも知れません。

神様は、私たち一人ひとり、愛を持って創造されました。一人ひとりに目を留めて関心を持ち、導いておられます。私たちは、神様からの期待に答えているのでしょうか。神様は私たちに、いったい何を期待しておられるのでしょうか。

今日は、ルカによる福音書13章1節から9節を通して、「期待はいつも裏切られてばかりだが」という題でお話しします。

## II 本論部

### 一、全ての人は皆罪人

13章1節には、何人かの人が来て、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたということを告げました。それは、当時の総督ピラトの命令で神殿で礼拝をささげていたガリラヤ人を襲って殺させたので、ガリラヤ人の血がささげものの血に混ざったということです。この事件には、政治的な背景もあったでしょうが、この事を伝えた人々は、このような殺人事件に遭遇して殺されたガリラヤ人たちは、何か悪い事をしたので、罪が多くあったので、このような目に遭ったのでしょうか、と問いかけているようなものです。

イエス様の答えが2節、3節です。「イエスはお答えになった。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だからだと思おうのか。決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」」

神殿での礼拝中に殺害された人々は、他の人々よりも特別に罪があったというわけではない。決してそうではない、と強く言われました。ユダヤ人は、因果応報という考え方をし、悪い事をしているから、罪があるから苦難に遭い、良い事をしている人、罪がなけれ

ば苦難に遭うことはないというような考え方であったのです。

4節では、シロアムの塔が倒れて死んだ18人がいて、その被害に遭って死んだ人々は、エルサレムに住んでいた人々よりも罪が深かったので死んだのか、とイエス様は問われ、このことに対して、「決してそうではない。」ときっぱりとお答えになりました。

被害に遭わなかった人々は、自分たちは罪がないから、罪が少ないから守られた、というように自分の事は棚に上げて考えていたのです。そのことに対して、イエス様は、3節と同じように、5節で「**言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。**」と言われたのです。

イエス様は、「**悔い改めなければ**」と言われました。「悔い改め」とは、旧約聖書のヘブライ語では、「立ち返る」つまり、「神に立ち返る」ことを意味しています。また、「悔い改め」とは、「考えを変える、考え直す」という意味があり、神様に背を向けて生きて来た生き方を改めて、神様の方に向き直って生きることを示しています。

イエス様と共に十字架にはりつけにされた犯罪人のひとり、最初、もう一人の犯罪人と同じように、イエス様に向かって、「自分を救い、我々も救え」と言っていました。イエス様が自分に向かってののしり、罵倒する人々に、「**父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。**」(ルカ23:34)というとりなしの祈りとその態度に、考えを変えて、考え直して、イエス様を救い主と信じて、イエス様を罵倒し続けるもう一人の犯罪人に「**この方は何も悪いことはしていない**」(ルカ23:41)と弁護し、「**イエスよ、あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください**」(ルカ23:42)と告白したのです。するとイエス様は、この犯罪人に、「**はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる**」(ルカ23:43)と言われたのでした。彼は、今までの自分の自己中心の生き方から神様に信頼する生き方に方向転換し、救われたのです。イエス様は言われました。「**言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。**」と。私たちは、神様に信頼して、自分の人生をお委ねしていきたいと思うのです。

## 二、期待できない者に期待をかけてくださる

このように語られたイエス様は、ひとつのたとえ話をされたのです。ある人がぶどう園にイチジクの木を植えていたといひます。ぶどう園にはぶどうを植えるのが普通ですが、イスラエル地方では、土地があまりよくない状態なので、ぶどう園に、他の木を植えることがよくあったようです。ぶどう園でぶどうを植えている隙間に、空いた所にイチジクの木を植えるのです。しかし、ぶどうの実はなるのに、イチジク木は実を一つもつけなかったのです。詳訳聖書には、「**一つもみつからなかった。**」とあります。リビングバイブルには、「**期待はいつも裏切られてばかり**」とあります。今日の説教題は、この個所からつけました。主人は、ぶどうの実もそうですが、毎年、毎年、イチジクに実がなっていないか、今年はどうかと期待していたわけですが、3年間全く実がならない。まさに、「**期待はいつも裏切られてばかり**」だったのです。期待しなければ、がっかりすることはないのですが、主人は、このイチジクの木に大いに期待したのです。だから、実がつかないことにながっかりして憤り、園丁に、「**もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見**

つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。」とイチジクの木を切り倒すように命令したのです。イチジクの木は期待外れだったのです。今までに実を付けないし、これからも実がなる可能性がないので、切り倒せ。他の木を植えて実をつけるようにと生産的な考えでした。少し前、生産性がないとかで物議をかもしだした内容がありました。この世は生産性がないものは切り倒せ、なのです。成長しないものは、見捨てられるのです。何も生み出さないものは切られてしまうのです。

ところが、3年間実をつけないイチジクを世話してきた園丁が主人に言います。8節です。「園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。』」切り倒せという主人の命令に対して、切り倒さないでこのままにしてほしいと嘆願します。以前よりもよりよく木の周りを掘ったり、肥料をやるので、1年猶予を下さいと願うのです。私の世話が足りなかったのかも知れない。私がさらにこの1年、心を込めて世話をしますから、1年間はこのままにお願いしますと言うのです。リビングバイブルには、「まあまあ、ご主人様。もう一年、もう一年だけお待ちください。特に念入りに、肥料をやってみましょう。」とあります。そして、9節には、「そうすれば、来年は実がなるかもしれませんが、もしそれでもだめなら、切り倒してください。」とあります。リビングバイブルには、「それで来年実がなれば、もうけもの。だめで、もともとです。それから切り倒しても遅くはありません。」とあります。主人はイチジクの木に期待外れだと思っていますが、園丁は、3年間実をつけないイチジクの木に対しても期待をかけるのです。期待するのです。この園丁こそ、イエス・キリスト様なのです。私たちが、たとえ何の実をつけなくても、成長しなくても、生産性がなくても、前進しなくても、私たちの存在価値を認めて下さり、変わらずに期待し続けて下さるのです。だから、心配しないで、イエス様の愛と恵み、憐れみを素直にいただきたいと思うのです。

### 三、いつまでも差し伸べられている神の手

9節には、「そうすれば、来年は実がなるかもしれませんが、もしそれでもだめなら、切り倒してください。」とありますが、来年1年間実がならなければ、切り倒して下さい、ということでしょうか。来年になって、主人が、「もう四年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。」と言うと、園丁は、「御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれませんが、もしそれでもだめなら、切り倒してください。」とあと一年の猶予を願うでしょう。一年たって、「もう五年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。」と言うと、園丁は、「御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれませんが、もしそれでもだめなら、切り倒してください。」ということでしょう。「そうすれば、来年は実がなるかもしれませんが、もしそれでもだめなら、切り倒してください。」というのは、将来に対して、開かれた所に置かれているということだと思ふのです。言い方を変えれば、とりなしの祈りとでも言えるでしょうか。イエス様が十

十字架の上で、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」ご自分に向かって、ののしり、罵倒し、物笑いする人々、ちっとも反省も悔い改めもしない人々のために、父なる神にとりなしの祈りをなさる、このことと同じのように思うのです。

3節と5節には、「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」とあります。「滅びる」とは、苦難や災難に遭遇し、死ぬと言うことではありません。ガリラヤ人がピラトに殺されたとか、シロアムの塔が倒れて死んだというような、苦難や災難で死ぬということが、ここでいう「滅びる」ということではありません。悔い改めなければ、苦難や災難に遭うというならば、災難や苦難がないことが救いと言うことになります。しかし、イエス様は、ヨハネによる福音書16章33節では、「あなたがたには、世では苦難がある。」と言われました。リビングバイブルでは、「確かに、この世では苦難と悲しみが山ほどある。」とあります。苦難や災難があることが滅びではないのです。

ヨハネによる福音書3章16節、聖書の富士山と言われる個所です。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」ここにも「滅びる」という言葉がありますが、それは、永遠の命を得るということの反対の言葉として記されています。ですから「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように永遠の命を受けることができない」ということです。けれども、イエス様は、私たちが永遠の命を与えるために、ご自分の命を差し出して下さったのです。十字架の上で、究極の裁きを受け、血を流し、死んで下さり、よみがえることにより、私たち罪ある者にも永遠の命を与えて下さるのです。そして、全ての人々が罪の赦しと魂の救い、永遠の命を得ることができるよう導いて下さるのです。

今、このイエス様を無視して生きているのでしょうか。イエス様に背を向けて生きているのでしょうか。それは、私たちの本当の姿ではありません。的外れの状況にいるのです。けれども、私たちが背を向けようとも、無視しようとも、イエス様は私たちに期待し、愛し、手を差し伸べておられるのです。その愛に応答しようではありませんか。

### Ⅲ 結論部

ヨハネによる福音書9章には、生まれつき目の見えない人が出てきます。弟子たちは、イエス様に質問しました。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」生まれつき目が見えないという不幸は、両親の罪か、本人の罪かと聞いたのです。イエス様は、「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」と言われました。

私たちは、不幸と言う苦しみや悲しみを経験します。でも、それは私たちの罪の結果ではありません。イエス様は、私たちが経験する苦しみや悲しみは、神のみ業を経験するためであるとはっきりと言われたのです。

また、神様の前に成長の遅いものです。期待に応えられない者です。切り倒してしまえ、と言われて当然の者です。しかし、そのような者になお期待して下さる。ご自身の最大の愛を持って私たち導いて下さるのです。この週も、イエス様に信頼してまいりましょう。